

CATV

カナダのCATV普及率は世界一。全国に五百二十六のCATV会社があり、利用者は四百万にのぼる。利用者の三〇パーセントは三十チャンネル、七〇パーセントは十二チャンネルのテレビ番組を視聴することができる。

ケーブル線は全長七万五千キロもあり、特にウイニペグと四つの農村を結ぶ Manitoba 州電話公社の同軸ケーブルは世界一長い。またマニトバ州の二大都市、ウイニペグとブランドンを結ぶ二百三十四キロのケーブル網には、高度な双方向通信を可能にするカナダ製の増幅器が用いられている。

テリドンを使った双方向CATVも実用化へ向かっており、CATVはいま新しい時代を迎えようとしている。

放送衛星(DBS)

家庭やホテル、公共施設などに設置したパラボラ・アンテナに向けて、直接テレビ電波を送信する直接放送通信衛星(DBS)。カナダでは、すでに一九七六年、国内通信衛星ヘルメスを使った送受信実験に成功し、一九七九年九月には、TVオンタリオが通信衛星アニックBを使って、州北西部向けに一週間九十四時間の衛星放送を開始している。同年十二月には、CBCとブリティッシュ・コロンビア・テレビも、一日二十四時間の衛星放送を始め、その後、衛星放送のチャンネルは三つに増えた。

CBCの実験は八二年九月に打ち切られたが、あとの二チャンネルはアニックBから、八三年六月に米国のスペースシャトルで打ち上げられたアニックC3に引き

つがれた。
アニックC3は、直接放送の能力をもった世界最初の商業衛星。いわゆるDBSそのものではないが、受信アンテナが

放送衛星の受信アンテナ。



直径一・二メートルあり、チャンネル当り一番組の送信であれば、直接放送がじゆうぶん可能。カナダは今後引き続きアニックC衛星を打ち上げる予定になって、

レーダー衛星

カナダ北極では石油や天然ガスの探査・開発が進んでいるが、物資を補給する

船や海上に浮かぶ開発基地にとってつねに気になるのが、氷山や流氷の動き。その対策として、カナダでは一九九〇年までにレーダー衛星を打ち上げる計画を進めている。

カナダ政府が開発に取り組んでいるレーダー衛星は、側方監視レーダーを積載して雲や闇の中をつきぬけて海上の水の状況を探り、その細かいデータを通航中の船舶や地上局に送って、輸送船や開発基地の安全を図ろうというもの。衛星は、気象観測や作物の出来具合、海上の油汚染などを調べるのにも利用される。

またカルガリーのインテラ環境コンサルタント社は、このほど海水・地勢査察レーダーを開発したが、これは小型飛行機にも積める高感度のレーダー。機上で即座に、しかも詳細な写真が得られ、それをただちに地上に電送できるため、石油開発基地などの安全性が大幅に改善されるという。

オタワのカナディアン・アストロノティクス社も、どんな天候でも昼夜水の状況を観察できる航空機積載レーダーを開発、カナダ政府環境省に納入することになっている。

セル電話

おり、専用の放送衛星を打ち上げるまで、アニックCを使って衛星放送ができる。

パソコンなどと並ぶ新世代の通信手段といわれるセル電話が、カナダでいよいよ全国的に導入されることになった。

セル電話とは、都市を幅一〜十二キロの周波数区域(細胞セル)に細分化し、無線電話をとりつけた車が区域から区域へ移動するにつれて、コンピューター網が通話の周波数をそれぞれの地域に合わせて切り替える仕組みの電話。パトローカーや消防車、タクシー、輸送トラックなどが使用している従来の移動電話が、構内電話と同じく特定の基地としか通話できないのに対して、セル電話はセル電話同士の通話が広い範囲で可能なほか、通常電話とも接続できる。国際通話はもちろん、将来は移動通信衛星によって、遠隔地でも利用できるといふ。

カナダでは昨年十二月、連邦政府がカナダ全土のセル電話網経営をモントリオールのキャンテル・セルラー・ラジオ・グループに認可したことにより、一九八五年には、カナダの二十三の都市で本格的なセル電話(八百〜九百メガヘルツ)通話サービスが開始されることになる。



移動電話。